

鶴見大文学部ドキュメンテーション学会

NEWS LETTER

# Documentation No.33

ドキュメンテーション



新入生見学会：三溪園にて

## よい夏休みを——新入生を迎えて

2024年春、文学部ドキュメンテーション学科に38名と編入生1名、ドキュメンテーション専攻には1名の大学院生が入学しました。新入生の多くはコロナ禍で中学・高校時代を過ごし、高校3年の春に5類移行と、感染症との付き合い方が大きく変化するタイミングに立ち会うことになりました。現代は変化の激しい「知識基盤社会」と言われています。期せずして、われわれは一つの大きな社会の変化を経験したことになります。

さて、大学が学問の場であることは言うまでもありません。しかし、それと同時に共に学ぶ友人や教員との出会いの場でもあります。2009年の「第8回世界青年意識調査」では青年の意識の変化を明らかにするため、18歳から24歳を対象とした質問紙調査を行っています。この調査の項目の一つに「学校に通う意義」を尋ねる設問（複数回答可）があります。学校等に在学している人の中で最も多い回答は「友達との友情をはぐくむ」(65.9%)、「専門的な知識を身に付ける」(62%)、「学歴や資格を得る」(61.4%)の3つです。学校等に在学していない人も含めた回答の場合、「友達との友情をはぐくむ」(65.7%)が最多です。多くの人が学校を、友人との出会いの場、友情を深める場と認識していることが窺えます。2004年の「第7回世界青年意識調査」には友人関係についての設問があり、「親しい友人（恋人を含む）がいる」と回答した人に対し、友人を得たきっかけを尋ねています。

回答は「学校で」(91.5%)が最多でした。韓国、アメリカ、スウェーデン、ドイツでも同様の結果が出ており、国を問わず、友人を得る場としては学校が最も多いということがわかります。2010年の「非行原因に関する総合的研究調査」でも友人関係についての設問があり、親しい友人を得たきっかけは「今の学校の友達」と答えた人が9割以上でした。

これをお読みいただいているみなさんには「親しい友人」と思える人はいるでしょうか？ その人との出会いのきっかけは、どのようなものでしょうか？ もしまだ「親しい友人」と思える人がいないのであれば、今後の学生生活で出会う可能性もあります。同じ学科である必要性はありません。文学部の他の学科や、他の学部、他の大学の学生、アルバイト先や趣味の友達、という場合もあるでしょう。

私はアメリカ公共図書館史を専門にしていますが、1950年代アメリカの図書館員や出版関係の人々の人間関係について調べる中で、あるプロジェクトの中心メンバーが同じ大学の出身だったという事がありました。学生時代の友人関係は、将来とても大きな財産になるかもしれません。感染症に気をつけながら、良い夏を過ごしてください。

ドキュメンテーション学科 小南 理恵



# ドキュメンテーション学科 創設 20 周年



## 〈学科設立から 20 年〉

学園創立 80 周年の年に新設されたドキュメンテーション学科は、創立 100 周年を迎えた本年で 20 年目を迎えます。学科設立の趣旨にあった、「従来の図書館情報学では十分ではなかった文献資料そのものの専門教育の強化と、それらを効率的に扱う先端的人文系情報処理学の専門教育」の必要性は、20 年が過ぎた今日でも依然として色褪せず重要でありつづけています。デジタル化された情報に浸る生活からは文献資料を扱う機会が奪われ、書物に記録され伝えられている文化を読み取る技能を育成する重要さは増しています。また文献から生み出される情報を扱う人文系情報処理学の重要性は、この 10 年間で日本でも急速に認知された結果、東京大学や大阪大学では人文系情報処理学（Digital Humanities）を扱う組織が新設され、人文系大学共同機関を束ねる人間文化研究機構では重点領域になりました。20 年前、学科設立に掲げられた目標は、日本の人文科学研究の先端を見越していたことになり、ドキュメンテーション学科はその魁から先端を走り続けてきたといえます。

## 〈変容と停滞〉

設立からの 10 年までの学科の特色を変容と表現したほど、鶴見大学に新しい事業を導入してきた自負がありました。この伝統はその後の 10 年間でも常に心がけ、とりわけ学外との交流を活発にさせた学科運営がされてきました。

平成 28 (2016) 年から令和 1 (2019) 年までの 4 年間は、毎年海外から研究者を招聘し、授業や学生・教員との交流の機会を設けてきました。

平成 28 (2016) 年には神奈川県文化連携社会科専門部会と連携した学習会を開催しました。

平成 28 (2016) 年には、授業「特別実習 1」でそれまで学科で運営していたインターンシップを大学に移管し、代わりにフィールドワークや古典籍目録の電子化などのテーマ研究の成果を図書館総合展で報告しています。

平成 29 (2017) 年には、横浜市が開催するヨコハマトリエンナーレ 2017 に横浜美術館と共同で参加し、大学図書館所蔵資料を使った「つながる源氏 ひろがる古地

図」の展示を横浜市美術館で開催しました。

平成 27 (2015) 年から令和 1 (2019) 年までの 5 年間は、毎年台湾の世新大学を中心に、海外から学生を短期で受け入れ、日本研修と在校生との国際交流の場を提供してきました。この間に、授業「特別実習 2」として世新大学には学科の学生も短期の台湾研修を実施しています。

このような学外との交流は令和 1 (2019) 年までは活発に実施されていました。ところが、令和 2 (2020) 年に武漢を発生源とする新型コロナウイルスによる Covid-19 の猛威が学外との活動を全て止めてしまいました。

一方で、コロナ禍はドキュメンテーション学科の教育体制が、設立趣旨と同様に、未来に向けたものであったことも証明しました。

令和 2 (2020) 年度の授業は、全国の大学でオンライン授業の実施に向けて混乱が生じているなか、例年から 1 ヶ月遅れた 5 月に始められましたが、この時、ドキュメンテーション学科では全学生に PC 貸与をしていたことから、機器の調達に支障はきたさず、他大学や他学科では実施が困難であったリアルタイムによる授業の配信を直ぐに行うことができました。これは学生のみならず教員にとっても幸運な環境でした。また他の学科に先駆け、オンラインのみで授業を完結することなく令和 2 (2020) 年の 7 月には感染症対策に十分に配慮しながら集中講義として教室での対面授業も実施しました。これはドキュメンテーション学科教員の教育に向けた覚悟として評価できるものと自負しています。

## 〈教育体制〉

この 10 年間で、教育体制は大学院・カリキュラム・人員の面で大きく変わりました。

平成 30 (2018) 年には文学研究科ドキュメンテーション専攻が博士前期課程（修士課程）と博士後期課程（博士課程）が設置されました。学科開設からの念願であった大学院が学部設置から 14 年後にようやく実現されたこととなります。これにより図書館職員の社会人教育や、図書館学の教員養成が可能となる体制が完成しました。

また、令和 4 (2022) 年には学科設立後 2 回目のカリ



キュラム改定をしました。旧カリキュラムの完成度は高く、10年以上安定した運用ができていましたが、司書資格の法律改定に伴うカリキュラムの変更や、文学部内の卒業所要単位の修正などの外的変化により歪みが生じたことで見直しの機運は予てよりあり、コロナ禍による教育体制の見直しを契機に、カリキュラムの大改定を実施しました。大きな特徴として、専門英語の廃止、代わりに1年必修の基礎演習の新設、卒業論文に代わる卒業課題研究への転換があります。

加えて、この10年間には定年退職を含めた教員の入れ替わりが多くありました。同時に日本文学科の人員枠から1名の異動があり、10年前は7名の専任教員と2名の実習技術員の体制であったものが、現在は教員が1名増えて8名の専任教員と2名の実習技術員で指導にあたっています。

平成27(2015)年に長塚隆、原田智子が定年退職、新たに田辺良則、河西由美子が着任、平成30(2018)年には、久保木秀夫先生が日本大学に転任され、新たに加藤弓枝が着任、令和4(2022)年に加藤弓枝先生が名古屋市立大学に転任(その後、名古屋大学に転任)、同年9月に新たに万波寿子が着任、また増員枠として同年4月に小南理恵が着任、令和6(2024)年には角田裕之が定年退職、新たに望月有希子が着任しました。この10

年で8人中5人が入れ替わったことになります。念願であった図書館学教員の増員が純増員として実現したことは幸運でしたが、大学を取り巻く環境からすると、この1名の増員に相応しい責任も同時に生じることになります。

### 〈これからの10年〉

創立100周年を迎えた本年、令和6(2024)年は、コロナ禍が開けた初年度になります。設立以来の変容の文化をもう一度取り戻すことができるのか、新カリキュラムは旧カリキュラムに負けない成果を出せるのか、教員が8人体制となり図書館学教育は充実するのかなど、これからの10年は課題の検証に向けた取り組みが求められてきます。

また、少子化の波はついにドキュメンテーション学科にも及び、本年(2024年)学科設立以来初めて入学者数が定員を割りました。学生募集に向けた活動は今後より一層必要になってきます。

設立20年目は厳しいスタートとなりました。学科設立時に尽力された先生方が描いた設立趣旨に応えるため、現職教員はより一層、学科の発展に努力を続けてまいります。



20年前のドキュメンテーション学会総会



# 授業紹介

## 図書館学各論 2 a

この授業では、受講生が5つの班に分かれ、鶴見大学図書館にて企画展示を行いました。それぞれの班でテーマを決め、それに関する展示資料を考えることで、図書館資料を活用する方法を学ぶものです。展示のポスターを作成し校内の各所に掲示して広報活動を行ったり、利用者がOPACで検索する際に展示資料の所在を知ることができるよう図書館システムを操作したり、POPや展示の装飾を作成したり、図書館の実務も経験しました。（望月有希子）

### 選書や展示方法に工夫

山田 優花<sup>3年</sup>

講義を受けることで、展示には「存在に気付かれない色々な図書を紹介する」「貸出冊数を増加させる」といった意義があることを学んだ。

実際に展示をしてみることで、選書の難しさや利用者に見てもらいやすい展示の仕方を知ることができた。選書の難しさについては、私は「愛」に関する本を選書したがOPACで検索すると哲学や心理学の分野に偏ってしまった。そのため、0門～9門の幅広い分野の資料になるように検索ワードを変えたり、ブラウジングして本を探したりという工夫をすることができた。利用者に見てもらいやすい展示の仕方については、本や機の配置・装飾などによってかなり見やすさが変わってくるため、最適な展示の仕方を考える大切さを学べた。

### 様々な視点を持つことが大切

粕谷 志音<sup>2年</sup>

今回の学生企画展示では、「やりたい！」と思ったことをすべて実現できたのがとても良い経験になりました。将来図書館に就職したとしても、授業での班の展示のようなものは作れないかもしれないので、学生である今しかできないことを最大限試せる環境があって良かったです。

また、オープンキャンパスなどで展示を見た人の反応を直接受け取れたことも、貴重な経験でした。狙い通りの場所に興味を持ってくれる人もいれば、予想していなかった場所に関心を示す人もいて、自分たちの感覚だけでなく第三者の客観的な視点からの反応を見ることができ、改めて様々な視点を持つことの大切さが思い出されました。このことは今後の活動にも活かしていきたいです。

### 様々な視点を持つことが大切

遠藤 希美<sup>3年</sup>

自分たちで考えた展示を実際に図書館で行うことは、そこで働かないと経験できない。それを授業内で行えたことがすごく良い経験になった。

班のメンバーと展示のテーマを出し合うところから、意見が多く出てきて活発な話し合いができた。各週のテーマや展示方法など、メンバーそれぞれの発想を共有し、意見を組み合わせることで良いものを作ることができ、展示を完成させたときの達成感があつた。色々な意見や、他の班の展示を見て、自分自身にはない発想や考えていなかった視点からの展示方法を学べた。

展示のために本を集めてくる、所在変更、実際に展示をする、展示のためのPOPや装飾品を作成するなど、実務的な部分を経験でき、今後に生かしていきたい。

## 図書館サービス論2／図書館サービス特論

図書館の機能の一つとして情報提供がある。そして、” Nothing about us without us.” の精神に基づき、誰に対しても情報アクセスの機会均等が保障される必要がある。そのために図書館は、一つの情報資源を、障害の社会モデルや利用者の背景に基づき、その特性に合わせ、様々な形に換え、提供する必要がある。この授業では、様々な障害に合わせた図書館資料やツール、具体的な実践例について学ぶ。

(元本章博)

### 多様な利用者のために

大場 遥<sup>4年</sup>

この授業では、公共図書館を中心とした障害者に対するサービスについて学ぶ内容となっている。他の講義でも、図書館に関する勉強をしてきたが、この講義ではとくに「視覚障害」に注目している。テキストを「ヤンキー君と白杖ガール」という漫画にしているぐらいだ。また、ただ話を聞いて学ぶだけでなく、実践も多い講義だ。例えば、点字器を使って、自分の名前や学部学科名を打ち込む作業や、周辺にある点字の調査と点訳なども行った。このような興味深い経験ができると共に、司書を目指す上で考えなければならない問題も多く出てくる。図書館を利用する人は様々であり、起こる問題も様々だ。そんな時、司書は多角的な視点を持って、行動しなければならないことを、改めて学んだ講義である。



授業風景：図書館学各論2



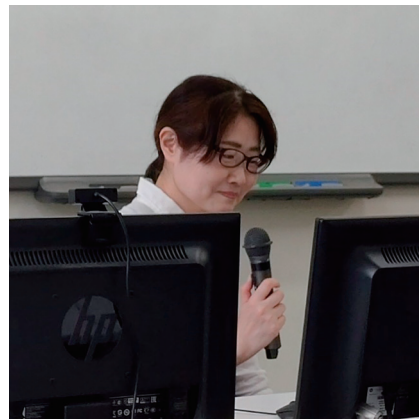
# 新任教員紹介

## ■ 曝書会を行いませんか？

ドキュメンテーション学科 望月 有希子

こんにちは。4月よりドキュメンテーション学科に着任しました。図書館学コースの授業を担当しています。どうぞよろしくお願いいたします。

私は図書の劣化や保存について研究しています。この研究を始めたきっかけは、江戸時代や明治時代の和装本を実際に手に取れる機会に恵まれたときに「100年以上前の和装本がこんな綺麗な形で遺されていて、今でも手に取れるなんて凄い！！」と感動し興味をもったことです。そして、多くの和装本を観察するようになり、本文紙に所々、穴が開いているものがあることに気がきました。それらは、一見すると模様のようにも、切り絵のようにも見え、美しいとさえ思ったのですが、なんとそれは虫が本文紙を食べてしまった痕でした。それを知ったときに「大切な図書が虫に食べられては大変だ」と思い、図書の保存に関心を持つようになりました。



古くからの図書の保存管理方法に曝書があります。曝書とは図書を陰干しにして風を通すことにより虫払い、湿気取りを行い、同時に目録と照らし合わせて蔵書の点検を行い、また図書の破損状態の調査を行う作業です。この曝書は日本では奈良時代から社寺を中心行われるようになり、図書館においても明治時代に行われていましたが、明治末期に害虫駆除として燻蒸が導入されはじめたことや、その他の様々な理由により、次第に行われなくなっていきました。現在、図書館では、曝書は蔵書点検を表す言葉としてわずかに残っているだけです。本来の虫干し、湿気払いの作業としての曝書は、足利学校、宮内庁書陵部、寺社などの古典籍を多く所蔵している機関でのみ伝統が受け継がれ行われています。私は曝書をしているところを見学したことがあります。和室に多くの和装本を開いて並べている光景に風情を感じました。そうした中でふと「曝書を行うことで、経年により本文紙に蓄積した有機酸を揮散させ酸性化を抑えることはできないだろうか？」と思いました。そこでこの効果を確認する実験を行いました。すると本当にこの効果を確認できたのです。このことから、曝書のような古い習慣にも、視点を変えれば再評価できることがあると学びました。

私は鶴見大学で、風通しの良い場所に図書を広げて曝書会を行う夢を持っています。曝書により図書の湿気取りや有機酸の揮散などを行いながら、図書をお披露目し、古くからの図書の保存管理方法（習慣）を伝える会にしたいと思っています。皆さん、私と一緒に曝書会を行いませんか？

# ソフトウェアセミナー

## ■ 学生主体の勉強会

2年  
相川 奈緒子

ソフトウェアセミナーという勉強会は、毎週水曜 18時から 20時までの間に活動しています。活動内容は、ITパスポートという資格試験の合格を目指した勉強です。先生が講義をするのではなく、参加学生が主体となってセミナーをしているのが他とは違うところではないでしょうか。参加者は、過去に出題された問題を解いてきて、セミナーでは、その問題を紹介したり、解説したりしています。解説は各自工夫を凝らしており、一つの問題で様々な単語の意味を理解できるようにパワーポイントや板書を用いています。また、復習問題を持ち込んだり、わからなかった問題を皆で解きあったりと、やりかたは人それぞれです。参加者全員、試験合格に向けて真剣に取り組んでいます。

## No.19

## 【プラハ市中央図書館〔プラハ、チェコ〕】

*Central Library, Municipality Library of Prague, Czech*

中世の街並みを色濃く残す旧市街地にある観光名所のひとつカレル橋の袂の門から、もうひとつの観光名所天文時計に向かう道の途中にプラハ市役所の広場があり、その一角にプラハ市中央図書館がある。

建物自体は重厚な作りなのだけれど、中に入るとこじんまりとした空間が出迎え、その左右に同じくらいの空間を使った書架の部屋がある。中央図書館なのに開架の数が少ない。実はプラハ市には44もの公共図書館があり、これはプラハ市の自慢らしい。図書は分散管理されている。棚にはチェコ語の本に加えて英語の本も多数揃えられている。

雑誌のコーナーは全てチェコ語のものだが、その種類は多く、人口比からすれば驚く量である。出版文化が強い国は国力が強いという見方があるが、『変身』のカフカ、『ロボット』のチャペック、『スラブ叙事詩』のムハ(ミュシャ)、『スラブ序曲』のドヴォルザークなど、歴史の中で国の統治者は変われど文学美術音楽の分野で高い文化性を示してきた民族・文化の歴史をみれば、出版文化が国力を支える説に納得してしまう。



日本人は残念なことに、欧米に根付くこういう空気を学ばずに戦後多くの図書館を作ってしまった。日本の公共図書館は街の中心にない。また図書館という空間に決まった理想がない。文化理解には100年経ったくらいではまだ十分ではないという事実が悲しい。中世の町並みがそのまま残る1000年の歴史が詰まったプラハで、変わるもの変わらないものから多くのことを学ばせてもらった。

(大矢一志)

図書館の2階はテーブル席になっているのだが、面白いことに何故か螺旋階段での移動になっている。おそらくこれは教会にあった図書室の作りをそのまま現代にも生かしたのだろう。図書館の空間はどうあるもので図書館はどこに建てられるべきなのか、チェコの人々の共通認識を見た思いがした。

日本人は残念なことに、欧



アクセス：旧市街地の中心地にあるプラハ市役所の北側にある。市役所の東側にはチェコ国立図書館があり、そこにはガイドブックにも載っている予約制で見学できる1700年代の古い図書室(Baroque Library)がある。ここは狭くて混む。日曜日は閉館で、土曜日は季節により閉館。

アドレス：Mariánské nám. 98/1, 110 00 Josefov <https://www.mlp.cz/>



## ■神秘的な雰囲気の中で

熊井 朋美<sup>1年</sup>

開講式の時にいろんな方向から鐘の音が響いてきて、大学と同じ敷地内にいることが信じられないような神秘的な雰囲気を感じました。

焼香は何度か葬儀でやったことがありますが、あんなに大人数でやるのは初めてで、少し緊張しました。私はお香の香りが好きなのでゆっくり楽しめたかったのですが、私が座っていた位置にはあまり届かなかったのが少し残念でした。雲水の方に、總持寺にはお茶室があると聞きました。諸堂拝観の時には見る事が無かったので、すごく気になります。いろんな所で花がきれいに咲いていたので、きっとお茶室から見える景色も素敵なのだろうと思います。

初めてのことばかりでしたが、とても良いことを経験できたと思います。一つ残念なことがあるとすれば、精進料理を食べてみたかったです。

## ■修行に励む雲水さんに感銘

本間 悠<sup>1年</sup>

長時間の坐禅は初めてで寝てしまわないか心配だったが、始まったら意外とリラックスできて、時間が経つのがとても短く感じた。姿勢や、呼吸を整えるだけで心が落ち着き、良い時間を過ごすことができた。

また、歴史あるお寺の内部を見学することもできて良かった。見学しながら、雲水さん達の修行の様子や、日々の過ごし方を知ることができた。見学の途中で、彼らが毎日雑巾掛けをしている廊下を実際に触らせてもらうことができ、とても綺麗で驚いた。お寺の中は古いのにとても綺麗で雲水さん達が毎日頑張って修行しているという事が感じられた。

## ■時空を超えて伝わる「禅」

設楽 恵太<sup>1年</sup>

様々な未知な物事に触れた。特に興味深かったのが、「禅」だから今も残り続けているという言葉だ。言葉は時空が違えばその分伝えたかった情報が抜け落ちたりしてしまう。しかし、「禅を組んで何も考えない」という行動は、徹底的に無駄が削ぎ落とされている。

「掌を合わせて念じる」ように「腕を組んで考える」ように「腕と足を交互に前後させて歩く」ように、国や言語の隔たりを超えて、いつか今の地図や辞書が意味をなさなくなったとしても禅は残り続けると強く感じた。情報を扱う専門家になる身として、とても興味深い半日だった。



□「ドキュメンテーション」第33号をお届けします。

□ドキュメンテーション学科は今年で創設20周年を迎えました。この間の学科の歩みを振り返ってみました。

□3月に角田裕之先生がご退任され、新たに望月有希子先生が着任されました。

ドキュメンテーション 第33号 令和6（2024）年8月25日（土）

鶴見大学文学部ドキュメンテーション学会 〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3 ☎045(581)1001 発行責任者：伊倉史人

学科ホームページ：http://ccs.tsurumi-u.ac.jp/docu/ 学科ブログ：http://blog.tsurumi-u.ac.jp/docu/